

資料

第9回作業科学セミナー抄録 (2005年)

基調講演

作業科学の過去,現在,未来

Ruth Zemke

佐藤剛記念講演

作業とは何で(form), 何の役に立ち(function), どのような意味があるのか(meaning)?

吉川ひろみ

特別講演

作業療法のナラティブとドラマ性

鷺田孝保

ワークショップ

身体表現をすること:身体表現—作業療法—作業科学」

里美のぞみ

シンポジウム

「作業科学が作業療法に与える影響」

司会: 吉川ひろみ

シンポジスト: 小林法一, 近藤敏, 斉藤さわ子, ボンジェ・ペーター

研究発表

国際協力における「川を描く作業」の意味と効果

吉田美穂

作業科学に支えられた作業に焦点を当てた実践

港 美雪

脳血管障害を経験した男性の障害適応の過程—作業の視点からの分析—

西野 歩

高齢者の‘場所づくり’

坂上真理

健康増進教室で自分の能力に目覚めた A さんの作業を通じでみえてきたこと

西上忠臣

佐藤剛記念講演

作業とは何で、何の役に立ち、どのような意味があるのか

What is the form, function and meaning of occupation?

吉川ひろみ（県立広島大学保健福祉学部）

文献やセミナーを通して作業科学を学び、学生に作業科学を教える中で、作業についての理解が日に日に深まっているように感じている。作業科学は作業の form と function と meaning を研究する学問だといわれている¹⁾。この機会に、私の周りにある作業にまつわる知見を整理してみたい。

1. 作業とは何か (form) : 柔軟性に富み変幻自在な作業の魅力と捉え難さ

- 1) 何が作業か (identify) : 日常での活動や課題の集まりで (groups of activities and tasks of everyday life), 個人や文化によって名付けられ, 構成され, 価値と意味が与えられたもの (named, organized and given value and meaning by individuals and a culture) という定義を受け入れたい¹⁻⁶⁾。人が行うことのすべてが作業ではないが, 作業になる可能性はある⁷⁾。身体運動を伴わない作業もある。
- 2) どう呼ばれるか (named) : 「芋煮会」「どんどやき」「チャット」など, 国や地域, 時代により, 作業には名前がつけられる⁶⁾。新しい作業もどんどん生まれている。
- 3) どうまとまりをつけるか (chunks) : 複数の複雑な活動が集まって行われる (名付けられる) 作業もあるが, 一つあるいはいくつかの活動だけで成り立つ作業もある。
- 4) 階層構造がある (level) : 単純な運動・行為から文脈に深く依存する複雑な作業まで, 明確な区分は見出せないが, 作業には何らかの階層性がある^{4,8,9)}。
- 5) 文脈依存性 (contexts) : 物理的, 社会的, 文化的, 制度的, 時間的, 個人的, スピリチュアルな, バーチャルな状況の影響を, 作業から排除することはできない^{2,3,7,9,10)}。

2. 作業は何の役に立つのか (function) : 作業療法が存在する理由

- 1) 作業をする個人がより健康になる (health) : 身体的, 精神的, 社会的に良い状態になるために, 疾病治療, 疾病予防, 健康増進として作業を使うことができる。
- 2) 作業をする個人が成長する (development) : 作業を通して人は道徳的, 倫理的な行いができるようになる。何が良いかを考え良い行いをするようになる。
- 3) 環境が変化する (environment) : 人が作業をすると環境が変わる。
- 4) 歴史が作られる (history) : 人の作業の積み重ねが人類の進化の歴史であり, 未来を作る。

3. 作業にはどのような意味があるのか (meaning) : 作業科学に導かれる世界

- 1) 何か別の目的や目標を達成するための手段としての作業 (as means) : 人の健康や成長, 環境変化のための手段として作業が行われることがある。作業がどれほど, 効果的に効率的に目標を達成したかが, 手段としての作業の価値を決める⁸⁾。
- 2) その作業をすることそのものに価値を認める目的としての作業 (as end) : 生活に欠くことのできない作業, 人生の豊かさを象徴する作業。その時, その場で, そのように行われる作業そのものが, 喜びや幸福をもたらす作業。別の目標のための手段となることもあるかもしれないが, 他の目標を達成しようがしまいが, とにかく, その作業をすることだけでも意味をもつ作業がある⁸⁾。人は人生の中で, このような意味のある作業にめぐり会い, その作業を行い, 自分が自分であることを確認したり, 世の中に貢献したりできる存在である。意味のある作業に出会えない人がいたり, 意味のある作業ができないような世の中は不公正であることを認識し, 公正 (occupational justice) に向かうよう取り組んでいかなければならない^{9,10)}。

文献

- 1) Larson E, Wood W, & Clark F: Occupational science: building the science and practice of occupation through an academic

- discipline. In Crepeau EB, et al (Ed), Willard and Spackman's Occupational Therapy 10th Ed, Lipincott Williams & Wilkins, Baltimore, pp.27-30, 2002
- 2) カナダ作業療法士協会 (著) 吉川ひろみ (監訳) : 作業療法の視点 : 作業ができるということ. 大学教育出版, 2000
 - 3) American Occupational Therapy Association: Occupational therapy practice framework: Domain and process. Amer J Occup Ther 56: 609-639, 2002
 - 4) Polatajko H, et al: Meaning the responsibility that comes with the privilege: Introducing a taxonomic code for understanding occupation. Can J Occup Ther 71: 261-264, 2004
 - 5) Occupational Terminology. Journal of Occupational Science 8(3): 38-41, 2001.
 - 6) 吉川ひろみ : 作業療法における「作業」の変遷. OT ジャーナル 39: 1160-1166, 2005
 - 7) Pierce D: Occupation by Design. F. A. Davis, Philadelphia, pp37-236, 2003
 - 8) Fisher A: Uniting practice and Theory in an occupational framework. Amer J Occup Ther 52: 509-521, 1998 (斎藤さわ子 : 学びたい世界の作業療法. OTジャーナル 37: 410-414, 2003)
 - 9) Trombly CA: Occupation: purposefulness and meaningfulness as therapeutic mechanisms. Amer J Occup Ther 49: 960-972, 1995 (吉川ひろみ : 学びたい世界の作業療法. OTジャーナル 38: 144-147, 2004)
 - 10) Zemke R: The 2004 Eleanor Clarke Slagle Lecture: Time, Space, and the Kaleidoscopes of Occupation. Amer J Occup Ther 58: 608-620, 2004
 - 11) Townsend E: Occupational therapy's social vision. Can J Occup Ther 60: 174-184, 1993 (吉川ひろみ : 学びたい世界の作業療法. OTジャーナル 37: 239-242, 2003)

特別講演

『作業療法のナラティブとドラマ性』

鷲田 孝 保 (茨城県立医療大学)

人は、自分の物語の中で生きている。文脈の中で生きている。生活世界の中で生きている。時と場所（時間と空間）と不可分に生きている。生まれる前の世界を継承し、生まれたときには、すでにたくさんの物語を背負っている。そのような、一回限りの人生を生きているひとの物語にかかわる作業療法士も、やはり自己の物語を背負って生きている。

科学の世界を包括した生活世界の世界観が必要である（図）。科学の再現性とは違った、生活世界の方法論としてソフトシステムズ方法論が湧き上がってくる。

近代科学が、網の外に落としてきた物語の世界を中心にすえた学問を構想しようとするならば＜演劇＞モデルがもっとも有力な手がかりとなる（中村雄二郎）。

作業療法士は脚本家、演出家、舞台監督と類似してはいないだろうか。作業療法のドラマ性について考えてみたい。

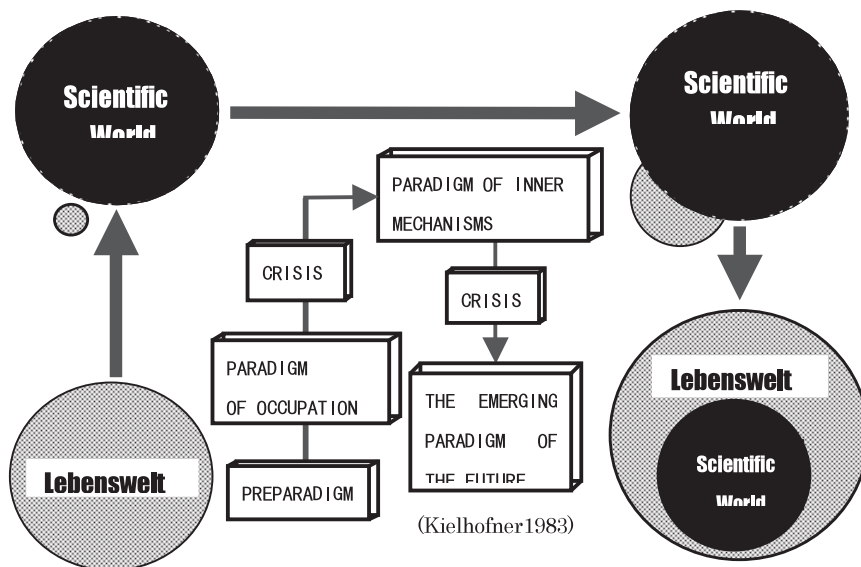


図 作業療法の歴史と世界観 (2005 鷲田)

シンポジウム

作業の見方を「モノ」から「コト」へ

小林法一（北海道大学医学部保健学科）

つくば学会のある講演を聞いていて、「なんだか前に似たような話を聞いたな、ああ、作業科学で聞いたんだ」と、ふと思うことがありました。それは「“思い”のモデルを使った新しいSSMベースのアクションリサーチ」という題の講演でした。演者の内山氏は、『日常生活はモノとコトが混ざり合った世界である。ところが、科学的な方法論と言われるものは「コト」の世界を取り除き、「モノ」だけを研究してきた。』と述べ、さらに『「モノ」とは見る対象である。一方、「コト」とは“思い”として感じるものである。例えばこのOHPプロジェクターは、「モノ」として見ることは可能だが、子供にとっては「おもちゃ」であり、この装置の開発者にとっては「自分の技術を誇示するモノ」、会場を掃除する人にとっては「ジャマモノ」でしかない。』と説明していました。この話の瞬間、私は札幌の全国研修会（1995年）の壇上で生花の傍ら立つClark教授を思い出していました。Clark教授は会場に問いかけました。「ここに花があります。皆さんはこの花をどう思いますか？ 私は奇麗だと思えますし、・・文化を感じます・・花を生けた方はどうでしょう・・」

OHPや生花は誰にとっても同じ「モノ」です。しかし過去から現在までを過ごしてきた個人が“思い”として感じる「コト」は一人ひとり違います。作業にも同じことが言えます。ある人の食事を「モノ」として捉えた場合、評価の視点は「食べ物を口に運んで飲み込めるか」になりますが、「コト」の世界で捉えると「美味しい？」「食欲は？」「好物は？」「今度食べたいのは？」・・・・・という様にその人にとっての食事という見方になるでしょう。

「作業的存在」は、まさに人から作業を「モノ」として分離せずに「コト」として捉える世界観に属すと思います。作業科学はこの世界観を強調し、そしてその臨床応用や研究の仕方を示してくれるものと感じています。作業の見方が「モノ」から「コト」になると、現在の臨床だけでなく過去の臨床場面で感じた作業（療法）の不思議な力が明確になります。臨床での気づきが変わると新たな疑問も生まれました。そのため後に私は作業を学べる大学院に進みました。以下に、このような私の経験の一部を紹介します。

●老人保健施設の日課と行事づくり

Clark教授の講演を聞いたのは、丁度、所属部署を急性期部門から老健へ移した時期でした。この時、私は臨床5年目であり、幾度となく作業がクライアントの健康や生活に影響を与えることを経験し作業には不思議な力があることを実感していました。老健ではこれらの経験を活かしたいと考えていました。しかし、いざ実践しようとするとは簡単ではないことに気づきました。例えば入浴、趣味活動、季節行事、機能訓練などたくさんの作業をどのように提供するかということも当時の私にとって見通しのつかない課題でした。

解決の糸口は「作業的存在」に見方を変えることでした。作業を人から切り離して考えるのではなく当事者と一緒に、すなわち本人にとっての作業に興味を持つことでした。これにより、入浴時間を夜間へ、当施設版興味チェックリストの作成、趣味活動の予定表作成など様々な計画を実行しました。お祭りの企画では、入所者のお祭りの思い出をケアワーカーと一緒に探り、お酒は必修であることを確認しました。以来、老健での私の仕事は、見かけ上施設内の巡回、内実はクライアントと“思い”を持って接することになりました。

●生活時間、作業バランスの研究

大学院入学時に何となく感じていた私の疑問の一つは、老健には「なぜ、その気になれば何かできそうなのに、ベッドでボーっと過ごす人が多いのだろう」「それでいいのか」ということでした。この漠然とした疑問を研究に導いてくれたのは作業科学ジャーナルでした。WFOTの1998年大会から戻られた指導教官の宮前先生が「いいお土産があるわよ」と手渡してくれたのが、Time Use, Time-budgetの文字がタイトルに並んだOSジャーナルでした。引用文献を探るうちに作業バランスの概念を見つけ、さらに科研の研究グループで一緒だった吉川先生にアイデアをいただき、それが私の研究テーマに発展しています。

そして現在は学生や卒業生と作業科学を楽しんでいます。彼らの5年後が楽しみです。

「作業科学が作業療法に与える影響ー作業に焦点を当てることで変わった私の作業療法」

近藤 敏 (県立広島大学)

私は長年、作業は作業療法の「手段」だと思っていました。しかし、近年、作業療法の理論を学ぶにつれて、作業ができるようになること、すなわち「目的」として作業があることに気づき、むしろこちらが作業療法の主たる役割のように感じています。昔、私が担当した頸髄損傷のYさんは、手の機能回復の手段として使用した革細工が、退院後は、「日課となり自分を表現する重要な作業」となっていたことを思い出します。私は1972年、労働福祉事業団九州リハビリテーション大学を卒業しました。授業は、基礎や臨床医学に多くの時間が割かれ、私自身も医学の勉強に高い価値をおいていました。作業療法学の教員は、米国人作業療法士が中心で、おそらく、1960年代の米国の医学モデルの作業療法を実践してきた作業療法士であったと思われます。教科書は、ウィラード・スパックマンの作業療法第3版で、私は、全体の1/6にあたる100頁が割かれていた神経筋統合のための作業療法の章(現在の生体力学モデル・運動コントロールモデル)が面白かったのを覚えています。労災病院に勤務し、4年間の臨床の後、母校で運動学を中心とした授業を担当したこともあって、私の中では、医学モデルの作業療法がずっと継続されていました。今から思えば、労災医療の枠組みの中で、やってきた臨床と教育は、井の中の蛙状態であったと思います。10年前、広島に来て吉川さんと出会ったのが切っ掛けで、COPMやAMPSといった作業療法独自の評価法および作業に焦点をあてた作業療法にふれ、それ以降、私の作業療法が大きく変化しました。クライアントの作業遂行を支援することこそ作業療法士にふさわしい役割と思うようになりました。以下、私の作業療法がどのように変わったかについて述べます。

1. 教育

ADLでは、動作分析や自助具、疾患や障害に応じたADLの講義や演習では、物足りなさを感じて、最近では食事や更衣などのセルフケアの個人的な意味を学生とディスカッションする機会をもっています。作業療法士による生活時間調査では、健康な高齢者に比べ障害老人は休息の時間が多い、といったものがあります。しかし、名目上の作業種目や時間配分を見ても個人の生活を明らかにするには不十分で、質的側面から一日の作業を捉えることを授業では伝えています。具体的には、学生個々の日曜日の作業について、自分にとって価値がある作業なのか、内的期待の作業なのか、外的期待の作業なのか、などその作業バランスを学んでもらっています。3年次生の2週間の「地域臨床実習」において、主として通所施設においてCOPMを使用し、作業遂行上の問題を特定できるようになることを目標としています。私の大学では、学科横断的な本学独自の必須科目として「チーム医療論演習」設定されています。小人数のグループ(看護4名、放射・理学、作業、コミュニケーション障害学科は1~2名)で、症例検討を行いながら専門職の相互理解を深めています。このなかで、症例に使用された評価法の説明やデモンストレーションを交えた各学科の実習室回りをします。作業療法学では、AMPSとCOPMを見てもらいます。もし、これがなかったらどのような評価法を紹介すべきか悩んだと思います。

2. 臨床

三原市の認知症予防モデル事業に参画する機会が与えられました。プログラムは、作業に焦点を当てた作業療法およびクライアント中心の実践を基本とし、また認知症予防の観点から、計画、実行、振り返り、のプロセスを徹底しました。目標シートを用いて、うまくできるようになりたい作業を3つあげてもらい、類似したものをいくつかまとめ、我々が提供できる作業と折り合いのついた3つのグループ(E町内発見隊、クッキンググループ、創作活動グループ)ができました。グループでのディスカッションに時間をかけ、頻繁に各グループの計画の進捗状況をお互いに報告し、実行後は成果をまとめ、発表しました。高齢者の日常生活場面における記憶の自己効力感測定尺度(EMSES)を用いて効果判定を行ったところ、向上が認められています。

3. 研究

作業に焦点を当てること、また作業と健康の関係から私に関心をもった文献です。

Gail Whiteford: Occupational Deprivation and Incarceration. *Journal of Occupational Science*, 4(3):126-130, 1997. (作業剥奪にさらされた囚人がとった興味深い行動が報告されており、作業と健康との関係を理解した研究です)

Dana Howell: Neuro-Occupation: Linking Sensory Deprivation and Self-Care in the ICU Patient, *Occupational Therapy in Health Care*, vol.11(4):75-85, 1999. (ICU患者の感覚剥奪と感覚過負荷について詳しく描写され、ICUにおける作業療法の扉を開いてくれた研究です) ほか。

身体制限を伴う高齢者の自己練習による慣れてきた日常作業に従事する意志の変化

茨城県立医療大学 保健医療学部 作業療法学科 齋藤さわ子

[はじめに]

昨年度、身体制限を伴う高齢者が、慣れてきた IADL 領域の作業を、専門家の介入なしに繰り返し練習すると（以下自己練習）、その作業に再従事する意志（以下、意志）、その作業を遂行する効力感（以下、効力感）、その作業を遂行するための方法の受け入れ（以下、受入）と IADL 領域の課題を遂行する能力（以下、IADL 能力）が、統計的に有意に向上することを報告した。本研究では、何故、意志が変化したのか否かを理解するため調べたので報告する。

[方法]

対象者は地域で生活している健常高齢者（平均年齢 69 歳、年齢範囲 60～80 歳）17 名。夫婦あるいは単身世帯者。セッションは全 8 回で、対象者は、前半 3 回は身体制限のない状態でいつもの通りに課題遂行を行い、後半 5 回は、身体制限を伴った状態で課題を遂行した。生態的妥当性を高めるために、遂行課題は、対象者自身が慣れている IADL 課題を 2 つ選び、セッションは対象者にとってその課題を遂行するのに自然な時間に、対象者の自宅で行った。課題の難易度は身体制限を伴う状態ではじめて遂行したときに、身体的な努力や非効率性はあるものの自立あるいは軽度の援助が必要なレベルとした。何故、意志が自己練習によって変化したか否かについては、本研究用に作成した 6 点尺度の質問紙の答え、フィールドノート、および自己練習 5 回目終了後の約 20 分半構造化面接の逐語録をデータとし、継続比較法に基づき分析を行った。

[結果および考察]

意志が、何故、自己練習によって変化したか否かについては、「一回目の練習時の課題困難感」、「成長の可能性の実感」、「気楽」、「工夫をすることの楽しみ」および「課題をすることの重要性」が関わっていることがわかった。このうち肯定的に変化した理由としては、全てが関わっていた。否定的に変化した理由としては、「一回目の練習時の課題困難感」「課題をすることの重要性」が関わっていることがわかった。肯定的に変化した理由のうち、自らだけで成長できる可能性を実感したり、自分で工夫をすることの楽しみが語られたということは、専門家が傍で直接介入を行わない自己練習の方が作業従事を促進できる場合があることを示しているかもしれない。

[作業療法への応用]

身体制限を伴う高齢者を対象とした外来あるいは訪問作業療法では、1～2 週に 1 度という頻度で行うことは少なくない。少ない頻度で作業遂行能力をあげ、作業従事を促進し、より多くの日常作業にクライアントが参加できるようにいかにしていくことができるかが、作業療法士の大きな介入目標である。本研究の結果から、頻度の少ない作業療法の実践で作業参加を促す知識として以下のようなことが得られたと考える。

- 1) 適切な難易度の IADL 領域の作業であれば、何度か繰り返して遂行するよう自己練習を促すような指導を行うことで、作業従事への意志が向上し日常参加できるようになる可能性がある。
- 2) 自己練習指導をする際には、1 回目練習時の課題困難感には特に注意を払い、クライアント本人が予想したよりも難しいと感じたときには意志が低下する可能性があるため、何らかの介入が即座に必要なかもしれない。
- 3) 繰り返して遂行することで、日常でその作業へ従事する意味や重要性が変化し、それが従事への意志に影響を及ぼす可能性があり、自己練習を続けるべきかについての指針となるため、自己練習を始める前のその作業の遂行する意味や重要性やその変化についても理解が必要である。
- 4) 自らだけで成長できる可能性を実感したり、自分で工夫をすることの楽しみが得られるような配慮をした遂行練習を行うと、従事への意志が向上し作業参加に結びつきやすい可能性がある。

研究発表

国際協力における「川を描く作業」の意味と効果

吉田美穂

前 JICA 専門家 障がい者支援分野

パキスタン・イスラム共和国

札幌医科大学保健医療学部研究科

【はじめに】 国際協力の仕事は日々未知なことに会い、カルチャーショックを経験し驚きと感動を体感できる非常に面白い仕事である。様々な異なった文化背景を持つ人たちとの出会いは新鮮で、私たちの知らない価値観を学ぶことが出来る格好の機会でもある。しかし、初めのころの様々なカルチャーショックは楽しみであるが度重なると、相手のことが理解できない苛立ちとなり、お互いのコミュニケーションの難しさと、当初の目的であるカウンターパートへの技術移転の困難さに頭を抱えることになる。今回、岡山の作業療法士が開発した「川モデル」と呼ばれる分析ツールを用いて、パキスタンとヨルダン、シリアで活動する青年海外協力隊の隊員OT、PT、養護教諭、コンピューター・インストラクター、ソーシャル・ワーカーなどへ、彼らのカウンター・パートとクライアントの分析ワークショップを実施した。

【分析ツールとしての「川モデル」】 発表者は「川モデル」を1) 作業をおこなう対象者を分析するツール、と2) それに向き合う援助者の対象者（カウンター・パートやクライアント）と向き合う自分を分析するツール、と位置づけて用いた。このツールを用いることで、対象者の抱えている様々な困難、生命力、生活観、能力、外部環境などを「岩、水、流木、すきま、側壁」の比喻として対象者の状況を分析し視覚的にあらわし、自分の対象者への見方を知り、聞き手に対象者の曖昧な部分を共有してもらえ説明をすることが出来る。

【対象】 2005年6月と7月の2回、パキスタンで活動する青年海外協力隊員（OT、PT、看護師、助産師、養護教諭、コンピューター・インストラクター）10名にカウンター・パートや協力活動で接する症例に対する分析を目的にワークショップを2回実施した。また、同じ目的で11月にヨルダン、とシリアの協力隊員10名（OT、PT、養護、手工芸）に1回のワークショップを実施した。

【方法】 発表者がツールとしての「川モデル」の説明と、実際の使用例をパワーポイントで紹介した。その後、参加者に実際に「川」を描き、説明をし、他の参加者からの質問やコメントをもらった。その後、メールにより参加者からのアンケート調査をおこない、20人中10人から返答があり、ヨルダン、シリアの協力隊員からは

現在もメールの返答を待っている。

【結果】 「川」を描いた協力隊員の感想は一往に、「描いてみて、モヤモヤがスッキリした」というコメントであった。「日々の活動は、当然言葉もままならないし、価値観がまったく違ったりしますよね。何が問題で、自分にできることは何か、うまくまとまらず考えが堂々めぐりしてしまうことがあるので、*・中略・*自分自身気持ちに整理がつくから。不変なものに執着するより、何が出来るかという可能性を考えながらの活動を考えた方が自分も楽しいと思うから。」この感想は「川」を描いた協力隊員の代表的なものであり、異文化の中での協力隊活動でそれに向き合う自分を見つめ直す機会となっている。そして、「川」の発表者と参加者は共通点の多い体験を共有し、自分たちの協力隊活動としての「作業」の意味を捉え直している。

【まとめ】 「川」を描くことにより、カウンター・パートやクライアントを援助者である自分がどのように見ているかを認識することが出来る。異文化の中で、モヤモヤと曖昧模糊とした現状をあいまいな部分は残したまま、対象者の状態を自分として収まりの着くまとめによる理解が「川」を描くことによって可能になる。作業療法士が今後、国際協力の場に参加するときに、「川」を描く作業をカウンター・パートやクライアントと向き合う自分を知り、経験を他者と共有する有用なツールとして発展させていく必要があると考える。

作業科学に支えられた作業に焦点を当てた実践

港 美雪

吉備国際大学保健科学部作業療法学科

はじめに

現在、私は補助指導員として作業所に関わっている。対象者の作業の問題に向き合い、「作業」を十分に活用する視点を持ちながら、対象者の健康的な生活、さらには社会環境の発展に寄与できる取り組みを目指している。今回の作業科学セミナーではこの取り組みについて、活用した作業の知識（作業科学）にもふれながら報告したい。

作業の問題を見つけること

私はニーズを把握した後、「利用者の希望につながるように毎日を充実していくための支援」を利用者に申し出た。面接ではCOPM（カナダ作業遂行測定）やOSA（作業に関する自己評価）などの、作業の問題を見つけ対象者と共に取り組み、主体性を引き出すことができる評価法を活用した。面接の結果「満足できることをもつと

たい」,「将来社会に出ていくための準備をしたい」,「仕事をしていきたいけれど自分が何をしたいのかわからない」,「会話が苦手な仕事をするに積極的になれない」,「お金になる仕事をしたい」等,大切だが十分できていないし満足していない作業の問題について明らかになった。

作業を充実することへの反論

それぞれの対象者と“なぜ作業の問題が起きているのか”,“解決するためにはどのような方法が可能か”の話し合いに取り組んだ。その後の対象者の目標はそれぞれ異なるが,地域において働く機会や体験することの必要性,同時に社会環境への介入の必要性が共通していた。そこで作業所関係者の会議において,利用者の目標達成のため,地域の中で働く機会を充実する取り組みが必要であると発言し具体的に提案した。その後作業所と社会福祉協議会との業務委託契約により利用者が地域の高齢者住宅において清掃を週1回2時間,2名で行うという機会を得ることができた。また時給500円という委託料も決定した。契約成立に感動する声は多かったが,作業を充実する取り組みへの反論がなかったわけではない。「地域での活動機会を広げることは作業所の役割ではない」,「地域での活動を広げることがストレスになるのでは」,「自宅でのそうじをしていないのに仕事としてできるのか」などの疑問は取り組みの中で出されていた。

作業科学を参考に作業充実のよさを説明すること

ICF が採択された現在でも,病状安定を優先する支援方法が中心の精神保健領域の現場では,作業を充実する支援方法は,驚くほど頻りに反論を受ける。もしも作業療法士が,作業を充実することを通して支援したいと考えるならば,そのよさを説明できる準備が必要かもしれない。私は,“なぜ行おうとする支援方法が重要であるのか”の説明をその都度,作業を説明することによって行ってきた。“作業がどのように障害改善と健康的な生活に影響を与える可能性があるのか”や“人間が作業を通して様々な技能を習得している現象”などの作業の知識を参考に作業をすることのよさを説明する試みである。その結果,「地域における働く機会は必要だ」と簡単に作業充実のよさが理解される場面もあるが,答えが出なくなる場面もある。しかしどのように作業を充実することがよいのかを悩み答えが出せない状況は,これまで作業充実をやめさせるという方法のみが正解であった状況からは,大きな変化が起きているのではと,作業の説明の影響を感じている。

おわりに

作業に焦点を当てた実践として,対象者にとって重要

性の高かった生産的な作業領域の問題に対する取り組みについて報告した。今後はさらにこの問題への支援も進めながら,他の作業領域の問題に対しても作業の知識を生かして取り組んでいきたい。作業について語ってみると,当たり前のことを言っていることに誰もが気づく。しかし当たり前の現象もとても複雑で捉えることは難しく,作業科学はその説明を可能にし,作業に焦点を当てた実践を支えてくれる。これからも作業科学を生かし,当たり前の現象を語り,当たり前の作業を支援し,様々な困難を“作業をしながら幸せになっていく”ための支援プロセスにつなげていきたい。そしてさらに対象者が作業をしながら幸せになっていく姿や社会環境が発展していく姿を捉える取り組みにも挑戦していきたい。

脳血管障害を経験した男性の障害適応の過程

—作業の視点からの分析—

西野 歩

(専) 社会医学技術学院 作業療法学科

I 問題提起

脳血管障害を経験した人が障害に適応していく過程において,作業がどのように寄与するかを明らかにすることにより作業療法介入のあり方を吟味する必要がある。

II 目的

本研究の目的は,51歳男性の障害適応の過程を分析し,作業がどのように障害適応のプロセスに寄与したかを提示することである。

III 先行研究

身体障害者の心的回復過程は,障害受容という語で表現されてきた。障害受容という語が医療者からの恣意性を指摘されていることから,これと区別し本研究では障害適応という語を使用する。

Dubouloz(2004)は,RAの研究参加者は自己定義がネガティブとなるが自尊へと再構築していく過程で作業バランスの再確立や活動の修正が必要であると示した。Sharon(2005)は,脳卒中をもつ女性に対して調査し,身体障害を持つということは人生と生活の優先事項を再評価する機会であると述べた。

IV 方法

対象は51歳男性。半構造的面接形式のインタビューにて情報収集をし,本人了解の元MDレコーダーにて録音をした。事例が指定する場所にて1時間半のインタビューを行った。質問は,発症から現在までの様子とどのような作業を経験したかを尋ねるものであり,語りの中の出来事・作業を経験した際,自分をどのように考えてい

たかを質問した。データの分析は逐語録を作成し、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチで分析した。

なお、本研究は東京都立保健科学大学倫理委員会の承認の下実施した。

V 結果と考察

事例は、発症当事「衝撃」を受けたが、非麻痺側である非利き手での字の練習を開始することで復職という「目標への接近」を試みた。しかし、復職後通勤の困難さ、ゴルフ・飲み会に行かれなくなることで弱くなった職場の人との親和性を感じ、自身に存在したスティグマが影響し、「装具が象徴する障害への落胆」を経験し、自己認識は否定的なものとなった。自己認識が高まった契機は、スティグマを象徴する装具を外すための手術、新たな仲間とのスキーという作業を介しての強い親和性の経験と継続、新たな作業への挑戦と獲得であった。現在は、自己を障害者であるという認識はなくなるに至っていた。

VI まとめ

1. 51歳男性の脳卒中発症から21年間の障害適応の過程をグラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析した。
2. 結果、作業の経験と環境の変化を通して、自分を障害者と認識していないに至ったことが明らかになった。
3. 本研究により作業が自己認識の変化に影響を与え、障害への適応に促進的に働きかけることを作業療法士は再確認できる。
4. 本研究は一般的な脳卒中後の障害受容過程に汎化する際には限界がある。作業が与える障害適応への影響を今後さらに追及していく必要がある。

高齢期の‘場所’作りと作業

—意味ある作業を行うための‘場所’とは？—

坂上真理

札幌医科大学保健医療学部

私は、高齢者を入居対象とした軽費老人ホームで‘場所’と作業の関係性に焦点を当てたフィールド調査を行っています。第8回作業科学セミナーでは、‘場所’の意味に着目し、高齢期の生活再構築過程に認められる「与え合う‘場所’」について報告しました。

私達が、通常場所という場合には、「特定の位置」のことや「空間の特定の部分とその空間を占有しているもの」を示します。しかし、場所という言葉は多様な文脈で用いられ、上記以外にも物理的側面に付与された意味や個人の経験を示す場合 (Relph E, 1999; Tuan Y,

1977) があります。作業科学においても、「場所は作業することで形成される空間の経験 (作業的空間; occupational spatiality) である」(Zemke R, 2004) というように、意味的側面に着目した‘場所’の定義が報告されています。このような‘場所’の定義や場所が多様な文脈で用いられることの背景には、「作業の形態・機能・意味は場所の影響をうけ互いを分けて考えることはできない」(Hamilton T, 2004) といった指摘に示されているように、作業と場所の互いの結び付きの強さや絡み合いの複雑さがあげられます。以上をふまえ、本研究では‘場所’を「作業・人・(物理的側面としての) 場所が互いに関連し合い、その過程の中で場所が意味付与される現象」と定義し、物理的側面として述べられる場所とは区別して考えています。

ところで、「人は自分の好みの作業を継続的に行うために、それを促進する生活環境を選んでいる」(Carson M, 1996) ことや、作業的存在である人々は「場所を作り維持する行為、すなわち場所作り」(Zemke R, 2004) を行っていることが指摘されています。作業療法では対象者の「意味ある作業」の遂行が支援されますが、本研究では「対象高齢者は意味ある作業を直接的に、あるいは間接的に支える‘場所’作りを行っている」と考えました。実際に、2000年より断続的にフィールド調査を実施しているAケアハウスでは、多くの入居者に共通する‘場所’が認められました。また、入居者の作業遂行の様子を聞き取り調査していると、「忙しい (だけど、充実している)」や「体をもてあましていて、何をしたら良いかわからない」等といった時間に関する認識が多数認められました。さらに、「場所」と時間認識には何らかの関連性が伺われました。そこで、さらに詳しく検討するために、1) 意味ある作業の遂行を支える‘場所’とはどのような特徴をもつのか、2) 意味ある作業の遂行と‘場所’はどのように関連しているのか、といった研究設問をたて調査を進めました。データ収集はAケアハウスでの参与観察と理論的サンプリングによって選んだ12名の半構造化面接によって行い、データ分析にはグラウンデッド・セオリー法の継続比較法を用いました。

その結果、カテゴリーとして「作業的‘場所’のカテゴリー」、「作業バランスの時間的認識カテゴリー」が認められました。さらに、「作業的‘場所’のカテゴリー」には、前回の作業科学セミナーで報告した「与え合う‘場所’」の他に「受けとめられる‘場所’」と「馴染みの‘場所’」の3つの‘場所’の意味が認められました。それぞれの‘場所’は、成員間の関係性、時間性 (歴史性)、空間や構成員の開放性によって特徴付けられていました。「受けとめられる‘場所’」は保護的な意味合いが強く、情報提供者はそこで

安心感や安全感といった情緒的体験を得ていました。「与え合う場所」と「馴染みの場所」では、自分自身が能動的な働きかけを行うことによって、自己確認や自己の社会的位置づけを確認していました。その他、「作業的場所」の「作業のカテゴリー」と「作業バランスの時間的認識カテゴリー」を媒介するカテゴリーや「場所」の構築に戦略的に関与するカテゴリーが認められ、セミナーの中で併せて報告いたします。

なお、この調査の一部は、北海道高齢者問題研究協会の平成16年度調査研究事業として実施しました。

健康増進教室で自分の能力に目覚めたAさんの作業を通じてみてきたこと

西上忠臣, 近藤敏

県立広島大学保健福祉学部作業療法学科

北川美智子

県立広島大学大学院総合学術研究科保健福祉学専攻

【はじめに】現在、私たちは三原市内の糸崎町における健康増進教室を実施している。事例を通じて作業を中心に介入を行った効果について報告する。

【対象者】糸崎町(人口3,728人・高齢化率35.7%) 駅西地区の住民に対して回覧板により健康増進教室の説明会の呼びかけを行い、参加登録した30名(女:男=18:12 平均年齢73.2±6.3歳)に介入を行った。

【方法】作業ニーズ評価: 今回の作業ニーズの評価は、COPMを改良して目標シートと名称をつけて作業上の目標を作業ニーズ評価とした。目標シートは「自分がしてみたいこと」、「現在しているけど困っていること」を中心に集団で自己記入式で実施した。その結果、遂行度スコアは4.29±2.01点、満足度スコアは3.91±2.32点だった。

プログラム開発: 目標シートから作業ニーズは133項目挙げられ、カテゴリー化していくと34項目の作業ニーズにまとめられた。まとめられた作業ニーズから14個のプログラムを「関心のあることチェック」としてアンケートを行い、「ものおぼえを良くする方法」「うまく自分の気持ちを伝える方法」「聞こえづらいことへの対処法」「相手に伝わりやすい文章の書き方講座」「歩き方講座」「整理整頓術」を実施することとした。

プログラム提供方法: 今回はプログラム実施期間8回しか持てないため、6回でプログラムのすべてを行い、これらの中から生活に取り入れられる作業について振り返っていくこととした。介入期間は平成17年7月28日～平成17年12月8日である(現在実施中)。

【参加者Aさんの作業上の変化について】Aさんは糸崎町内で50年以上居住している73歳の男性である。現在は妻、長男夫婦と同居しており仕事を定年退職した後は年金生活を送っている。開始前に行った目標シートは表のとおりであった。プログラムには毎回欠かさず参加し、グループディスカッションや発表などを積極的にこなし、与えられた宿題も毎回確実に実施する熱心な参加者である。Aさんに対して今回のプログラムの効果を知るために目標シートの再評価を行うインタビューを実施し、それまで行っている作業にどのような変化が生じたのかを明らかにした。Aさんの目標シートの点数は表のように変化した。散歩の作業: Aさんはプログラム開始前にも散歩を日課として1日に1回行っていた。開始後は、人と出会い会話をし、景色を楽しみ、妻とスーパーで待ち合わせをして共に歩き、出来事を帰宅後に妻と会話することで、散歩した後の生活も変化していた。散歩の作業は、それまでの健康のために歩くという意味に地域との交流や妻との交流という意味が付与されていた。炊事の作業: 開始前には全く行っていない作業であったが、微妙な味付けを楽しみ、妻の身体的な負担を考慮して生活の中に取り入れていた。人の話を近くで聞く: 自分から率先して聞こえづらいことを周囲の人に伝える努力をし、さらに散歩の中にも近所の方々と話す中で聞こえづらいことに対する挑戦をしていた。妻との旅行: 今回の期間中には達成されなかったが、妻といつかは旅行に行くという目標を持ち、計画をたてるだけで遂行度、満足度ともに向上していた。目標シートで挙げられた作業ニーズ以外にも、地域の祭りに参加したり、講演会などの行事に参加したりと作業の範囲が拡大していた。これらのように、今回のプログラムの結果、Aさんの作業には、地域との交流とすることで多くの意味が取り入れられ、以前行っていた作業を再び行うようになり、さらに作業を行う場が拡大していった。Aさんはプログラムを通じて生活を再構築していた。

表: Aさんの目標シートの変化

作業ニーズ	遂行度 (前)	遂行度 (後)	満足度 (前)	満足度 (後)
炊事が上手になる	3	7	2	9
妻と散歩に行きたい	3	6	3	8
妻と旅行に行きたい	1	3	1	6
人の話を近くで聞く	4	10	3	10
書くことが嫌い	2	9	2	9